

風韻堂コレクションの中国内蒙古自治区の細石刃

齋藤 岳¹⁾

Microliths collected from unspecified site in the Inner Mongolia autonomous district of China
from Fuindo Archeological Collection
SAITO Takashi

キーワード：内蒙古自治区、細石刃、ドロンノール、研究史、風韻堂コレクション、大高興

はじめに

青森県立郷土館は、故大高興氏から寄附を受けた1万点以上の考古資料からなる風韻堂コレクションを所蔵している。つがる市亀ヶ岡遺跡出土品が有名であるが、幅広い時期・地域の重要資料が含まれている。

本稿では中国の内蒙古自治区の細石刃3点を図化し紹介する。サハリンの出土石器(福田ほか1993、関根ほか2009)とともに、大高氏の収集品の多様性を伝えるものとして重要と考える。

そのため、出土地を中心に詳細に考察する。それは受入台帳に登録されている「内蒙古自治区」、「ドロンノール」、「旧石器時代」、「細石器」という四つの情報を全て満たす出土地名・遺跡は探せなかったためである。出土地の「ドロンノール」には相応する可能性の高い地名が存在するが、「旧石器時代」ではなく、「新石器時代」の細石刃石器群が出土している。出土地の明確化及び旧石器時代という時代認識の検証は、本資料の価値に関わる最大の課題である。そのため、この部分に関してはその詳細についても、あえて丁寧に記載する事とした。

検討の結果、出土地は中国の内蒙古自治区で、新石器時代の細石刃石器群の出土遺跡として戦前から知られているシリングル盟のドロンノール(鳥居1911ほかは「多倫諾爾」、小牧ほか1931は「多倫淖爾」、英名はDoloon Nuur または Dolon Nor、漢語名は多倫：トールン)とするのが自然という結論となった。

そのため、大貫静夫らの内蒙古自治区ドロンノール及びホロンバイル採集遺物採集資料に関する大貫静夫らの調査研究成果(大貫編2002b、中村2002、折茂2002)との対比を行った。

その結果、新石器時代の細石刃としても、矛盾は生じないことが確認できた。

1 出土地・帰属時期の検討

大貫(2002a)によると、「戦前の細石器文化研究の初期には、内蒙古に細石器遺跡が多く存在することが知られており、内蒙古地域の多くの細石器文化遺跡を我が国の研究者や愛好者が踏査、遺物を採集した。それらの資料はかなりの量が日本国内に所蔵されている。内蒙古の細石器遺跡がいずれも現在は砂丘の中にあり、発掘調査をしたところで、層位や一括性を求めるのが困難な状況であることからすれば、戦前に採集されたこれらの資料はいまだその重要性を失っていない」とされる。

本資料の出土地である「ドロンノール」が戦前から知られているシリングル盟のドロンノールとみなしてよいのか、他の可能性が存在するかを検証するため、まずは、大高氏の著書内の記載を探した。そのうえで、内蒙古自治区の細石刃石器群の研究史を踏まえて検討した。

(1) 大高氏の著書内の記載

大高氏は医学博士の学位を持つ医師であり、弘前大学医学部助教授としても活躍された経歴を持つ。氏のコレクションにおいては、出土地は重要なものとして意識していたと筆者は考える。医師として、生物学系の分類学的な素養は充分備えていたはずである。コレクションでは出土地が不明な土器や石器は、確実性に応じて、「不明」、「〇〇町」、「青森県内」と階層を変えている(青森県立郷土館1973)。大高氏のご息女によると、氏は郷土館への寄贈の前には、数か月にわたり毎日のように収蔵庫に入りし「一冊の分厚いノートに、発掘場所、寸法、特徴等を書き込んだ、いわば風韻堂の戸籍簿を作成」し、収集品の整理とリスト作成に没頭している(大高勢津子1972)。

内蒙古の細石刃についての最初の記載は、東津軽郡蓬田村瀬辺地流れ遺跡で採取した細石刃様の石器の論考内にある(大高1972;注1)。「細石刃については、私の所蔵している内蒙古の多倫雨(ドロンノウ)遺跡出土の三点と、函館市立博物館に陳列されている細石刃のほかは、実見したこともなく」という記載である。

二度目の記載は、県立郷土館に寄付したコレクションについて回想する文章の中に「内蒙古ドロンノール遺跡出土の二～五万年前の旧石器」という記載がある(大高1977)。

旧石器時代とする年代観については後述することとし、まずは出土地から検討する。

1) 青森県立郷土館 学芸課副課長・副参事(〒030-0802 青森市本町二丁目8-14) 2)

(2) ドロンノールについての日本での著述

日本人考古学研究者による内蒙古の調査は、1907 年(明治 40 年)から翌年にかけて鳥居龍蔵夫妻による 1 年以上の長期のものが最初である。このときにドロンノール一帯の調査を行っている(佐々木高明 1993)。旅行記は『蒙古旅行』として出版された(鳥居 1911)。江上波夫(1976)は鳥居龍蔵夫妻は「元の上都の遺跡を訪れるため多論諾爾に赴いた。上都は蒙古のフビライ汗が即位したところで、北京に大都が奠められて後は、汗の避暑と遊獵のための夏の宮殿の所在地として、マルコ・ポーロの旅行記にも記載されている。」と記載する。

1908 年(明治 41 年)に東洋史学者の桑原隲蔵(くわばら じつぞう)も内蒙古に入り、ドロンノールを訪れている。紀行文を歴史地理学会の刊行雑誌『歴史地理』で発表する(桑原 1911)。

ドロンノールの郊外にある上都について両者の著作を引用文献として紹介する本も出版される(箭内 1930)。しだいに日本国内で上都とドロンノールが知られていく。

重要なのは、鳥居龍蔵が、ドロンノールの上都付近で、「土器の破片及び、これに混じりて陶器の一小破片、鉄の破片、小刀の折れ、その他石鏃、石器、石剃刀等の破片を存せり」(鳥居 1911)として石剃刀(細石刃)が採集できる事を記載している事である。

そして、烏珠穆沁(ウチムチン)の右翼旗出土の細石刃の写真が実物大で紹介された(鳥居 1914、第 30 図、東京大学所蔵資料として高島(1993)の 113 頁左上の写真の中に写る)。

ドロンノールを有名にしたのが人類学雑誌に掲載された小牧実繁・江上波男・駒井和愛・泉精一による調査報告である(小牧ほか 1931)。同著では鳥居龍蔵夫妻による調査を先行研究にあげている。

採取されたのは、「主として、碧玉(Jasper)、瑪瑙(Agate)、玉髓(Chalcedony)等を材料とした打製の細石器であって、いずれも美しい光澤と鮮やかな技法とを示して居る。最も多数を占める大小の石刃(lames et lamelles)は何れも断面扁平な三角形をなし、細長な形であるが、その繊細なために破損せるものが多く、完形品は見難い。」と記載された。

また、「ここで著しいものは鮮やかに打ちかけられた石仁(nuclés)で、前に述べた石刃の打ちとられた残屑であるから、その石刃と共に支那の中原やまた日本には見られない特殊な技法を示すのである。(西亜から阿弗利加、欧羅巴に於いて同様な手法を見)」という記述は、石刃技法の存在を記載している。日本の旧石器時代研究の始まりの頃には、蒙古の石刃は真正なものとして、比較対照資料となっている(注 2)。

この時の駒井和愛氏の採集品は東京大学に寄贈され、前述のように大貫を中心とした研究者らにより分析される。

また、小牧ほか(1931)ではドロンノールの町の北方に位置する三沙梁と、南方に位置する南沙梁の 2 地点が地図上で記載された。採集地点の写真も掲載された。特に三沙梁の地点は、採集地点の特徴となる窪地が明確に判読できる。読んだ人が石器採取可能地点に到達できるようになった事は重要である。発表の昭和 6 年から終戦の昭和 20 年まで、14 年の年月がある。現地を訪ねて石器を採集した人の存在はありうると思われるが、関連する情報は探し出せなかった。

(3) 日本に運ばれた時期と終戦前におけるシリングル盟ドロンノールの状況

3 点の細石刃は、1972 年 9 月の中国交正常化の前に大高氏のコレクションに入っている(大高 1972)。そのため、日本には 1945 年(昭和 20 年)の終戦(及び引き揚げ・復員開始)以前に運ばれたと考える。

内蒙古自治区のなかでも、日本の権益範囲内に建国された満州国内に位置する東内蒙古は特に日本と関連が深い地域である。次に関係が深いのは、その西に隣接する中華民国側のシリングル盟である。中華民国側にありつつも教育(エルドン パートル 2019)、軍事(白 2023)で日本と関係が深い。特にドロンノールは、シリングル盟の南東端に位置し、満州国側の赤峰市と近接する。満州国建国以来、「国境地帯」として重要性を増したため日本側から商業活動の調査が行われるなど注目された場所である(暁 2017)。

また、日本軍によるチャハル作戦が 1937 年(昭和 12 年)行われ、蒙古連盟自治政府の防衛のために日本軍は張家口に駐蒙軍を置く。1939 年 9 月 1 日、駐蒙日本軍の主導のもとで、張家口を首都とする蒙古聯合自治政府が樹立された。これにより内蒙古全域が日本の影響下に置かれることとなった。

そのため、ドロンノールであれば、日中戦争という障害があったとしても終戦時までは、一般の日本人も行き来できた可能性がある。

ドロンノールには世界文化遺産に 2012 年に登録された元の「上都の遺跡」(ザナドゥ; アルファベット表記では Xanadu Xanadumoo, Zanadu, Shangdu 等)がある。江上(1976)の記載を先述したが、マルコ・ポーロの旅行記に記されていることから、研究者のみならず一般の人にとっても旅行先の候補地となりうると考える。

(4) シリングル盟ドロンノールの表記の揺れ

まずは「ドロンノール」のカタカナ表記について考える。内蒙古自治区北東部のフルンボイル(呼倫貝爾)は慣用読みでは「ホロンバイル」である(本稿では、「ホロンバイル」の用語を使用する)。

地名表記の「揺れ」の中でドロンノールと同一と判断できるかを調べてみた。上海にあり、中国に詳しい実業家や外交官、政治家を多数輩出した東亜同文書院の内蒙古調査旅行の報告書の中でも、書かれた時期によって、「ドロノール」(森ほか 2010)、「ドロン」(森ほか 2011)という表記がでてくる。他の言語を音で示すと表記の「揺れ」は、発生してしまう。それは、先述した

ザナドゥーの英文表記にも表れている。中国語は地域によって発音が異なり、上海にいて北京語とは異なる発音に接していた彼らは、発音の「揺れ」は、現実のものであった。表記についても、あまり気にならなかったのかもしれない。

「ドロンノール」というカタカナ表記は探し出せなかった。しかし、筆者は細石刃に付された元々のラベルに英文表記があったとすれば、出土地名の問題は解決すると考える。前述のとおりドロンノールの英文表記は、Doloon Nuur または Dolon Nor である。語の最後の「r」の読み方はアルファベットを使用するヨーロッパの国々でも、変化がある。ドロンノールともドロンノールとも読むことは可能である。そのため「ドロンノール」は英文表記に由来したと考えておきたい。

さらにいえば、鳥居龍蔵の調査報告(鳥居 1911)以来、考古学関係者では一貫してカタカナでは「ドロンノール」の表記が充てられている。報告する遺跡・出土品について研究史の流れの中に位置づけて考古学分野の他者に伝えるためには記載は「ドロンノール」の表記でなければならない。そのため、筆者は一般の人が採集した（もしくは一般の人から経由してもたらされた）可能性を考える。研究者とは異なり、石器出土地点の地名表記についての「揺れ」を許容しうるのである。

また、一般の人を想定したのは、東京国立博物館所蔵のホロンバイルの石器の由来からの類推でもある。佐藤達夫(1961)によって紹介された資料であるが、ハイラル駐屯の日本軍関係者の方が、米内山庸夫の昭和 17 年 1 月刊行の著作『蒙古草原』を現地で読んで、昭和 17 年 7・8 月に現地で採集したものである。米内山の紀行文学を意識したような美しい文章表現(注 3)とともに石鏃を中心として石刃鏃を含むカラー写真図版が美しく、魅きつけられたと推測する。

米内山庸夫自身も北京滞在外務省留学生の時に、鳥居龍蔵(1911)の『蒙古旅行』を読んで感激しモンゴルに行きを志した(広沢 2004 ; 注 4)。内蒙古の紀行文に関しても、書物に記載された情報が、次の来訪者、研究者を呼び寄せてきたといえる。

(5) ドロンノールの同一地名の有無

同一地名の有無についても、ふれておきたい。

日本には横須賀の地名は神奈川県・静岡県・愛知県にあり、その 3 県にそれぞれ県立横須賀高等学校が存在する。横須賀と聞いて、通常は多くの人は神奈川県横須賀市をイメージすると思われる。愛知県や静岡県の横須賀の地名に関して、神奈川県の地名と混同されそうな場合は、それを避けるための説明がつくと思われる。

まずは、「ドロンノール」の語源から考察する。蒙古語で、9 つの湖を意味するとされている(小牧ほか 1931)。鳥居龍蔵(1914)によると「nor」は湖を意味する(全集第五巻 159 頁)。

かつては湖沼であった窪地が内蒙古に多数あるとしても、基本的には乾燥地帯である内蒙古自治区で多数の湖のある場所は限られると思われる。また、内蒙古自治区に漢族が移住する前は人口が少なく、同一名称の地名があったとしてもドロンノールといえば通常はシリングル盟のドロンノールをさすものと考えたい。他にドロンノールという地名があったとしても、シリングル盟のものとは混同されないための説明がつくものとする。なお、鳥居龍蔵(1911)の著書に係る東内蒙古の地名一覧には、同一名称の地名はみられない。

(6) 漢字表記を含めての検討

大高(1972)は、「内蒙古の多倫雨(ドロンノウ)」と漢字表記を含めて記載した。筆者は、「雨」は手書きで書いた「爾」の誤植ではないかと考えたことがある。内蒙古とその周辺では、海拉尔(ハイラル)、齐齐哈尔(チチハル)、哈爾濱(ハルビン)と「爾」は「ル」の音に充てられる。戦時中を医学生として過ごした大高氏は、当時の社会状況から「満蒙」地区の主要地名は一般常識として認知していたと推定する。そこで、手書き原稿で「爾」と記載していたものが「雨」となった可能性を考えて。しかし、それだけでは「ノウ」にあたる語が抜けることになる。整合性をとるためには、諾(淖)が脱落し「爾」を雨に誤植したという、やや複雑な想定が必要となる。しかし刊行年の 1972 年は終戦から 27 年後であり、植字に携わった方が年齢の若い方で「諾(淖)爾」の文字を正確に捉えられなかった。そして、執筆時間及び校正に充てる時間が少なかったと想定できることから、ありえないわけでもない(12 月 1 日印刷、10 日刊行の論考に、注釈の中ではあるが 11 月 20 日の実地調査の事まで記載されている)。

あるいは、前の持ち主から「多倫雨、ドロンノウ、Dolon Nor」と伝えられていて、大高(1972)の刊行後に「多倫雨、ドロンノウ」は誤記ではないか気づいた可能性もある。とすると、印刷済の「ドロンノウ」の訂正をあきらめて、上書き訂正する形で、ドロンノールに近づけて、ドロンノールにした可能性もありうるように思われた。

いずれも筆者の推測でしかありえない。明確さを欠くものであるが、他に候補が見つからないことから、シリングル盟のドロンノールの可能性が最後まで残る。他の候補は見つかっていない。

(7) 細石器の名称について

名称については、1972 年の著述にある細石刃ではなく、細石器となったのは、コレクションに入った時の名称が採用された可能性がある。美しい石器群として「蒙古の細石器」(米内山 1942)は知られていた。戦前の物であれば「細石器」の名称が一般的であり、入手時の情報も細石器だった可能性がある。

(8) 旧石器時代とした時代観について

内蒙古自治区では細石刃石器群は、もちろん旧石器時代に出現する。そのため、採集状況が不明な本資料は、旧石器時代なのか新石器時代なのかは、不明のはずである。

旧石器時代の細石刃石器群としては、モンゴルとの国境に近いチンスタイ(金太遺跡: 加藤 真二 2023・2024 a・b)では層位的な資料が得られている。

新石器時代では、趙宝溝遺跡、興隆窪遺跡、紅山後遺跡などの有名遺跡が日本でも紹介されている(王魏 2002 ほか)。また、前述のように、戦前の採集資料として鳥居龍蔵(1911)、小牧ほか(1931)、米内山(1942)による新石器時代のものが、日本では知られていた。

先に、シリングル盟のドロンノール以外の候補が見当たらない事を述べた。また考古学関係者では一貫してカタカナでは「ドロンノール」の表記が充てられており、それを使用していないことから一般の方が採集等に関与したと推定した。

旧石器時代という時期については、細石刃についての一般的な年代観から来た可能性を筆者は考える。風韻堂コレクションに入る前に、細石刃のみだった事が関係すると考える。筆者は細石刃が土器を伴わずに採取された又は細石刃のみが日本に将来した、あるいは収集家の間を細石刃のみが動いたものと考え。極東・中国東北部及び細石刃石器群の専門家を除いては、細石刃石器群は「外・内蒙古、極東北部では遅くまで残った」(大貫 2002b. 7 頁)ことは想定外であろう。

最後に、二～五万年前という年代について考える。5 万年前の年代値はヨーロッパで旧人から新人への移り変わる年代から来ている可能性を感じるところである。周口店上洞人の年代は約 2 万年前、ヨーロッパで細石器が盛行するマドレーヌ文化は約 2 万年以降である。ユーラシア大陸における旧石器時代の終わりについては、新石器時代(中石器時代)との境界設定の問題もあり、年代を明記しがたく、確実に旧石器時代に相当する年代値として 2 万年前が採用されたと考えておきたい。

以上のとおり、コレクションに入る前の持ち主が旧石器ととらえたため、結果的に導かれた年代と考える。そのため、旧石器時代か新石器時代かは実のところ不明と考えるのが自然である。

2 資料の観察(図 1)

図 1-1 は長さ 1.85cm、幅 0.75m、厚さ 0.2cm である。2 は、長さ 1.5 cm、幅 0.5cm、厚さ 0.15 cm である。3 は、長さ 1.30cm、幅 0.45m、厚さ 0.15cm である。

1・3 は上下が欠損している。折り取り加工かどうかは判然としない。いずれも単設打面の細石刃核から剥離されたものである。2 は、下方からの剥離痕が残る。両設打面の稜柱状の細石刃核から剥離されたものと考えられる。打面が残存し、パルプは明瞭である。

石材は、1 は玉髄である。2・3 は赤みのある珪質泥岩(珪質頁岩)に見える。しかし、小牧ほか(1931)では、ドロンノールの三沙梁では、碧玉・瑪瑙・玉髄等の原石が採取できるとし、大形の剥片を含めて石器が多く散布しており、製作所であると記載されている。いずれもシリカ鉱物であり、碧玉とされたものの中に珪質な堆積岩である「チャート」にあたるものが入っている可能性を感じるところである。また、内蒙古自治区のホロンバイルの細石器の石材では硬質頁岩が最も多く、珪質頁岩がこれに次ぐ(折茂 2002)。珪質泥岩(珪質頁岩)と硬質頁岩、そしてチャートの区分の境界についての詳細には立ち入らない事とし、観察表では珪質堆積岩と記載した。地質の専門家に肉眼での識別を依頼する事も考えたが、この地域の地質に詳しい方でないと当惑されると考え、石材名を特定しない記載とした。

石器の器表面の風化状況は、際立って古いわけではなく、際立って新しいわけでもない。

3 東京大学所蔵の内蒙古自治区出土品との対比

小牧ほか(1931)のドロンノールの採集品のうち駒井和愛採集品は東京大学に寄贈されており、大貫静夫らにより整理、研究がすすめられた(大貫編 2002)。

ドロンノールのものでは、石材はジャスパー、玉髄、珪質泥岩(母体となる泥岩層との対比を考えると珪質頁岩ではなく珪質泥岩という表記になる)の細石刃が報告されている(中村 2002)。細石刃の横幅は平均 0.64cm である。また、図 2-5 のように、両設打面の稜柱状の細石刃核がある。

そして、大貫静夫の観察によるとドロンノールの細石刃については、新石器時代の趙宝溝文化の物と類似点が認められている(大貫 2002c)。

また、ホロンバイルの米内山氏採集資料に関しては、後期旧石器時代末から青銅器時代のものと考えられている(折茂 2002)。両設打面の稜柱状の細石刃核もある(同著図 4-5)。

風韻堂コレクションの 3 点の細石刃の横幅は、1 が 0.8m、2 が 0.5cm、3 が幅 0.45m である。3 点の平均は 0.58cm であり、東京大学所蔵のドロンノールの資料の平均横幅 0.64cm と、大きく離れているわけではない。

石器実測図や観察事項からみて、新石器時代のものとしても、違和感がないと言える。

おわりに

内蒙古自治区の細石刃が風韻堂コレクションに加わった経緯は、書き残されたものが見つからず、不明である。しかし大高興氏の記述を探す中で、氏の多岐にわたる業績を知る事になった(注 5)。

中国内蒙古自治区のハイラル領事であり細石刃石器群を地数採集し、東京大学教養部博物館に寄附した七戸町出身の外交官の米内山庸夫氏の事も知った(注 6)。米内山氏の蔵書は青森県立図書館に寄贈され米内山文庫として同館のコレクションとなっている。

両氏に関連する文献を読み始めた結果、いずれも独創的な人生を歩んだ先人として、強く意識するようになった。ともに、生業とした医師・外交官としてはもちろんの事、文化・文化財に関しても大きな業績を残した。

そして本資料が、研究史上有名な内蒙古自治区の細石器（細石刃）として多くの人に知られ、活用されていく事を願うものである。

注釈

（注1）大高(1972)の『うとう』の論考の主旨は①発見の経緯②在京の研究者から細石刃に間違いはないと言われた事が書かれており、注の部分では③研究者による現地での追加調査の際、1 m²の試掘でローム層から細石刃核が出土しなかった事④細石刃様石器は、現地で採取できる円筒土器に伴うものであれば今まで知られていなかった石器群である事⑤別に細石刃が混入した可能性もあると考えた事が記されている。大高氏は「典型的な細石刃核は表採出来ず、また、約一平方メートルの試掘でもローム層中からは遺物が発見できなかった。」と記載したのであった。①発見の経緯のなかで重要なのは、以前、遺跡から「握斧(ハンド・アックス)と尖頭器(ポイント)」が発見され、在京の大学教授から「旧石器に間違いはない」と言われていた事である。これが氏の判断に影響した可能性がある。これらは、青森県立郷土館(2001)73頁の図版0512の風韻堂コレクションの瀬辺地採集の旧石器時代の4点の石器の可能性がある。大高氏は根拠がなく旧石器時代とするとは思えないためである。

③～⑤は、注の中に書かれており、校正に入った段階で、本文に手を加えないで形で記載されたと考える。また、江坂が新聞報道で核心部分（細石刃と認定できるか）について論点をずらすようなコメントを述べているのは、金木の偽石器問題の時のマリンガー氏のコメント（齋藤2012）と類似する。その直後、昭和48年3月刊行の蓬田村史でも大高は瀬辺地流れ遺跡の細石刃様石器を報告する。その中で大高氏は、細石刃と認定できるかは慎重に判断すべきと結論付けた。「問題は、はたして本遺物が北海道や関東・東北地方の一部などで発見されている、細石刃と同種類のものであるかどうかを解き明かさなければ軽々しく断定を下すことは出来ない。「近い将来、慎重な発掘によって、石片の出土層位、素材、製作技術、形態及び組成などの詳細が検討され、製作年代も決定されるものと思う。」と記載した。そして内蒙古自治区の細石刃については記載していない。検討事項の中で、「出土層位」に関しては、ローム層中からの出土が未確認な事、「製作技術」に関しては細石刃核からの剥離といえるか未確定なこと、「組成」に関することは細石刃核や彫器等の伴出石器の存在が確認できていない事を意味していると考え。古い石器ではないかと考えたのちに、慎重な判断を示した事は、五所川原市金木遺跡の偽石器を巡る杉原壮介氏の経緯（齋藤2012）と類似する。

大高氏が1977年に自費出版した『風韻堂雑録』では、考古学関係の論文として、『うとう』のものは記載されず、蓬田村史の論考が記載されている。そのため、『うとう』の記載は未定稿のような存在と捉えられ、それを訂正したともいえる『蓬田村史』のものが最終結論、完成稿と考える。

以上から次のような経緯を想定できる。…『うとう』誌を主催していた肴倉弥八が、細石刃を大高氏らが東津軽郡蓬田村瀬辺地流れ遺跡で採取したらしいという事を、何らかの形で知った。そして『うとう』誌の50周年記念号への特別寄稿として依頼した。現地調査に蓬田村役場の助役が参加した事と肴倉が蓬田村編纂していた事が縁になり昭和48年3月刊行の蓬田村史の原稿へ執筆が決まった。

なお、瀬辺地流れ遺跡の細石刃様石器については、採取当初の昭和47年(1972年)8月の大高氏の感激を伝えるご息女の作文がある(大高勢津子1977)。

江坂輝弥、渡辺誠により昭和47年11月19日に実地調査が行われた。蓬田村役場助役も参加している。翌日の昭和47年11月20日の青森県地方紙の東奥日報記事では、速報が掲載された。新聞記事では「江坂教授の話」として「細石刃だと見られる地層と石器群を見なければなんとも言えない。東京に帰って試掘の結果を検討してみる。結果がハッキリすれば来春にでも県教委を通じて発掘願いを出し、また文化庁へも予算要求をするつもりだ。」と述べている。

現地調査で、旧石器時代のもものと確認できると考えて執筆したものの、再考することとなった。『蓬田村史』で掲載が予定されていたため、その中で最終結論を記すこととしたのではないだろうか。

肴倉弥八(1972)『うとう』第78号の「編集後記」で「大高興先生の「瀬辺地遺跡の細石器様石片」の論文は東奥日報紙上に報道され、学界の注目を集めているもので、本県の旧石器研究に一大波紋を投じた。今後の発掘、研究にまつところ大きい。」と期待が感じられる記載がある。周囲からの熱い期待が寄せられていた事も金木の偽石器の時と共通する。

なお、当館の『風韻堂コレクション目録』では、「細石器ほか」、「旧石器時代?」となっている(青森県立郷土館1973)。受入台帳も同様であるが、「細石器?」、「旧石器時代」と図録記載された事もある(青森県立郷土館2001)。先に、『うとう』誌での大高氏の記述を①から⑤にまとめてみた。④については円筒土器文化で知られていなかったのは、石器製作遺跡の調査が行われていなかったためと考える。西に隣接する山田(2)遺跡は石器製作遺跡であった。石匙・石槍等の石器製作で生じる小剥片が細石刃様の剥片の中に含まれている可能性がある。⑤については、真正の旧石器時代の細石刃が含まれている可能性も残るが、459点の資料の中から抽出し、それを証明する事は困難である。また、川口(2003)は、「実見したところ、平面形は細石刃的であっても、剥離面の構成や剥離の方向から判断すると細石刃とはいえないように思われる」と記載している。

（注2）内蒙古の細石刃・石刃石器群が真正のものとされたことは重要である。戦後の旧石器時代の早い段階で、細石刃・石刃

石器群の理解に資することとなった。渡辺仁(1948)は真正な石刃技法を東京大学の資料では内蒙古のものと北海道のものの一部を除き、見いだせなかったと記載している。それが、兵庫県明石市の西八木海岸のものを破砕礫と看破したことにつながる。佐藤達夫(1959)は長野県野辺山遺跡群の細石刃の比較資料として内蒙古の米内山氏採集資料に着目し、実見するため米内山氏宅を訪ねている。内蒙古の細石刃石器群が真正のものと考えて、対比資料としたと考える。

(注3) 米内山(1942)の記述には、「蒙古石器には大形のものとして小型のものと二種ある。この小形のものは普通、蒙古細石器と呼ばれてゐる。(中略)これらの蒙古細石器は極めて美しい。ことに、鏃など、その細工も精巧であり色も美しい。半透明の水晶製のものあり、燧石製の飴色のもの、その他半白色のもの、黒色のものあり、緑色のもの、紅色のもの、縞模様のものなどあり、色とりどりで美しい。さうした美しい石器及びその石器破片が、風に吹きなでられた面滑らかな砂の上に散らばつて太陽の光線に光りかがやいてゐるのである。」(78頁)。色と光の表現は梶井基次郎の短編小説『檸檬』を思わせる詩情あふれたものである。旅情を誘う表現が随所にみられる『蒙古草原』は、紀行文学として書かれていて感じる次第である。それは、筆者が偶然、読むことになった米内山庸夫(1943)の旅行雑誌『旅』の「旅行指導」のコーナーに掲載された中国旅行指南の文章との違いからも裏付けられる。広大な中国を理解するのは難しい。各人が見た場所が、中国全域に拡大されてしまいがちである事を注意喚起する硬い印象の文体である。出版された時期が近いにもかかわらず文体が著しく異なっている。また、同書には、戦時下においても、「満州庫倫旗旅聞録」、「天山々脈を往く日本人」というタイトルの文章があり中国の辺境までが旅行趣味者の関心を持つ場所であった事が想像できる。

米内山が、ハイラル総領事として内蒙古で勤務したのは昭和8年から11年にかけてである。昭和9年には三上次男らに細石器の採集可能地点を教示する等の調査支援を行っている。田辺美江(2002)は次のように記載している。『北満風土雑記』によると、三上次男、駒井和愛、水野清一氏が昭和9年ハイラルを訪れ、三河地方を踏査しようとした際に、この年は雨が多く河が氾濫して目的地に近づけなかった。そこで、総領事の米内山氏に会って興安嶺中の温泉ハロン・アルシャンへと変更し、その付近にある細石器の散布する遺跡を踏査することにして、ハンダガヤやドロットで試掘調査をしている(三上次男、駒井和愛、水野清一1938)。このころより三上次男氏と米内山氏は考古学調査を通じて知り合いになったと思われるのである。米内山(1942)が「石刃」の用語を用いるのは、三上らとの交流の結果と考える。

(注4) 米内山は1912年7月から8月にかけて内蒙古を旅し、ドロンノールでは元の上都旧城付近のチベット仏教寺院で8月12日から22日まで滞在する(広沢2004)。細石刃石器群を採取できる状況にあったものの、米内山庸夫(1942)自身の記述では、中国江南の杭州領事の時代に畑から顔をのぞかせる緑色の青磁の陶片に魅了された後、内蒙古のハイラル総領事になってから細石器を収集することになっている。筆者は、母校である東亜同文書院の学生による内蒙古調査旅行が行われていた事(森ほか2010・2011)も内蒙古旅行の背景にあると考える。

(注5) 大高氏は、ユーモアのある語り口で収蔵品を解説した(大高1969)。その入手に関するエピソードでも読者を楽しませる(大高1979・1983)。一方で、幽霊やお化けの話も書き残した(大高1974・1979)。幅広い見識の中で、不可思議なものを排除しない考え方であり、その寛容さは「人生を支えるには二つの力が必要である。一つは生涯をかけた仕事であり、もう一つは、活力を生み出し、生活をエンジョイするための趣味である。」(大高1983の「はじめに」の冒頭の言葉)と書き記したことにもつながると感じる次第である。

大高氏は、つがる市車力沖のチェスボロー号の遭難事件を調査して、チェスボロー号カップの駆伝大会を実現させたように、社会への働きかけを行い実現できた人とする。ロータリー活動を通じて知己を得て、アメリカで調査をしたチェスボロー号をめぐる研究や活動は、車力村とアメリカ合衆国のメイン州バース市との姉妹都市としての交流に、さらには青森県とメイン州との交流へとつながった。それはメイン州博物館と青森県立郷土館の交流に発展し1997年の当館でのメイン州の特別展示につながった(青森県立郷土館1997)。

また、貨幣のコレクターとしてエラー銭の収集を行い、その研究書も残している。刀装具についてのコレクターでもあった。(注6) 杭州領事時代の青磁窯に関する調査と収集(米内山陶片)や、ハイラル領事時代のホロンバイル地方の細石器の収集と紹介、政府批判を行ったとして外務省を依願退職となった(米内山治郎1991)が、すぐに囑託として勤務した事を含めて、その人生と行動力に学ぶことにより、得るものは大きく、深い、と思う次第である。

引用参考文献

青森県立郷土館1973『風韻堂コレクション目録』

青森県立郷土館1997『特別展 アメリカ合衆国—メイン州の自然と文化 青森県〈青森県・メイン州友好協定締結記念〉』

青森県立郷土館2001『青森県立郷土館 収蔵資料図録-第3集・考古編(2)-』114～115頁

青森県立図書館1972『青森県立図書館 蔵書目録 米内山文庫篇』

天羽利夫2020「人類学者鳥居龍蔵の学問と人物像」『鳥居龍蔵の学問と世界』3～44 思文閣出版

江上波夫1976「解題」『鳥居龍蔵全集第十二巻』朝日新聞社 693頁

エルドン パートル2019「満洲国」時代における西部内蒙古文化教育論-啓蒙と共生『東洋学研究』56 109～118頁

大貫静夫2002a「研究の目的」『内蒙古細石器文化の研究』3頁

- 大貫静夫（編著）（2002b）『内蒙古細石器文化の研究 研究成果報告書』東京大学大学院人文社会系研究科
- 大貫静夫 2002c 「ドロンノールの細石器について」『内蒙古細石器文化の研究』125～128 頁
- 王魏 2002 「中国東北地方の先史文化」『青森県史 別編 三内丸山遺跡』359～400 頁
- 大高興 1969 『縄文文化遺物集成』自費出版 青森市
- 大高興 1972 年 12 月 「瀬辺地遺跡の細石器様石片について」『うとう』第 78 号 青森郷土会
- 大高興 1973 年 「蓬田村瀬辺地遺跡の細石刃様石片について」『蓬田村史』蓬田村
- 大高興 1974 『津軽霊界下界 幽霊から衛生学まで』北の街社
- 大高興 1977 「縄文の遺物に想う」『医家芸術』21 巻 7 号（大高興 1979 『風韻堂雑録』自費出版 青森市 263～267 頁に所収）
- 大高興 1978 『お化けと幽霊』北の街社大高興 1983 『趣味の骨董-縄文から現代まで-』北の街社
- 大高興 1979 『風韻堂雑録』自費出版 青森市 263～267 頁
- 大高興 1982 『ロータリーの国々』風韻堂出版会
- 大高興 1983 『趣味の骨董-縄文から現代まで』北の街社
- 大高興 1986 「チェスボロー号-に関する知見補遺-併せて遭難原因を考える-」うとう第 92 号
- 大高興 1987 『米国帆船チェスボロー号-救助の愛は海を照らす』北の街社
- 大高勢津子 1972 「遺物と父」（1972 年 12 月 13 日の東奥日報掲載；東奥作文コンクール秀逸 青森市南中三年（大高興 1979 『風韻堂雑録』自費出版 青森市 17～21 頁に所収）
- 折茂克哉 2002 「米内山コレクションにみるホロンバイル地方採集の考古学資料」『内蒙古細石器文化の研究 研究成果報告書』16～48 頁 東京大学大学院人文社会系研究科
- 梶井基次郎 1966 「檸檬」『梶井基次郎全集第一巻』5～13 頁 筑摩書房
- 加藤真二 2023 「中国細石刃石器群の展開」『日本列島および東ユーラシアにおける細石刃石器群の展開』55～59 頁 明治大学黒耀石研究センター・ハヶ岳旧石器研究グループ
- 加藤真二 2024a 「中国東北部の楔形細石核について」『第 23 回北アジア調査報告研究会 発表要旨』北アジア調査研究報告会実行委員会 2～5 頁
- 加藤 真二 2024b 『2020 年度～2023 年度日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究（B）研究成果報告書 ユーラシア東部における細石刃石器群の出現と拡散-中国北部クロスロード仮説の検証-』独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所
- 川口潤 2003 「東北北部地域の細石刃文化」『シンポジウム 日本の細石刃文化 -日本列島における細石刃文化-』ハヶ岳旧石器研究グループ 53 頁
- 桑原 隲蔵 1911 「東蒙古地方旅行報告書」『歴史地理』第 18 巻 6 号 39～55 (539～544) 頁
- 暁敏 2017 「書院生の内モンゴル中部の商業経済」『書院生、アジアに行く：東亜同文書院生が見た 20 世紀前半のアジア（愛知大学東亜同文書院大学記念センター叢書）』
- 小牧実繁・江上波男・駒井和愛・泉精一 1931 「中国多倫淖爾に於ける新石器時代の遺跡」『人類学雑誌』第 46 巻 第 8 号
- 齋藤岳 2012 「夏泊半島椿山海岸のエオリス様の「石器」と金木の偽石器」『青森県考古学』第 20 号 31～44 頁
- 佐藤達夫 1959 「長野県野辺山の石器」『考古学雑誌』第 44 巻第 8 号 182～185 頁
- 佐藤達夫 1960 「ホロン・バイルの細石器文化」『考古学雑誌』第 46 巻第 3 号 93～101 頁
- 佐藤達夫 1961 「ホロン・バイルの石器」『ミュージアム』第 125 号 19～21 頁
- 佐藤宏之 2002 「環日本海における広郷型細石刃核の分布」2002 『内蒙古細石器文化の研究 研究成果報告書』東京大学大学院人文社会系研究科 160～167 頁 ロシア沿海州南部 黒曜石の「他に珪質頁岩や凝灰岩・チャート等の細石刃核もある」
- 肴倉弥八 1972 「編集後記」『うとう』第 78 号
- 佐々木高明 1993 「鳥居龍蔵のアジア研究-その足跡を訪ねて」『徳島の生んだ先覚者 鳥居龍蔵の見たアジア』徳島県立博物館
- 徐子峰 2006 「紅山文化と中国北方文明の起源について」『人文社会科学研究所年報 4』133～145 頁 敬和学園大学
- 関根達人・齋藤岳・杉原重夫・金成太郎 2009 「サハリン（樺太）島内遺跡出土黒曜石製遺物の原産地推定-故船木鐵太郎氏コレクションから-」『明治大学博物館研究報告』第 14 号 79～90 頁
- 高島芳弘 1993 「東京大学総合研究資料館所蔵の鳥居龍蔵収集考古資料」110～117 頁『徳島の生んだ先覚者 鳥居龍蔵の見たアジア』徳島県立博物館
- 田辺美江 2002 「米内山庸夫氏とホロンバイルの細石器」『内蒙古細石器文化の研究 研究成果報告書』94～104 頁 東京大学大学院人文社会系研究科
- 鳥居きみ子 1927 『土俗上より観たる蒙古』六文館 1-1159 国会図書館デジタルコレクション
- 鳥居龍蔵 1911 『蒙古旅行』博文館（1976 『鳥居龍蔵全集第九巻』所収、朝日新聞社）
- 鳥居龍蔵 1914 「考古学民族学研究・東蒙古の原住民」『東京帝国大学理科大学紀要第三十六冊第四編』（1976 『鳥居龍蔵全集第五巻』121～197 頁、第 30 図ラゾアルは 148 頁、朝日新聞社）
- 中村雄紀 2002 「ドロンノールの細石器」『内蒙古細石器文化の研究 研究成果報告書』106～124 頁 東京大学大学院人文社会系

研究科

白那日蘇 2023 「蒙古軍政府成立前後における関東軍と徳王による募兵工作」『年報 Promis』第1巻第1集 神戸大学国際文化学研究推進インスティテュート

服部勇 2008 『チャート・珪質堆積物 -その堆積作用と続成過程-』 近未来社

広沢佐保 2004 「青森県立図書館米内山文庫について」『News letter』近現代東北アジア地域史研究会 [編] (16) 78～81 頁 近現代東北アジア地域史研究会

福田友之・工藤大 1993 『『風韻堂コレクション』のサハリン出土石器資料』『青森県立郷土館長さ研究年報』第17号 145～158 頁

三上次男、駒井和愛、水野清一 1938 『北満風土雑記』 座右宝刊行会

森久男・ウルジトクトフ 2010 「東亜同文書院の内蒙古調査旅行」『愛知大学国際問題研究所紀要』 136号 141～165 頁

森久男・ウルジトクトフ 2011 「東亜同文書院の内蒙古調査旅行 (続き)」『愛知大学国際問題研究所紀要』 138号 231～248 頁

森鹿三 「桑原博士の支那蒙古旅行 「考史遊記」の刊行に際して」『東洋史研究』 7巻第4号

箭内互 1930 『蒙古史研究』 633 頁 刀江書院

米内山治郎 1991 『米内山庸夫 成人大学講座 平3. 1 2. 5』 七戸町教育委員会 (講演資料)

米内山庸夫 1942 『蒙古草原』 改造社

米内山庸夫 1943 「志那旅行の特徴」『旅』第二十四巻第4号 2-3 頁 日本旅行倶楽部

渡辺仁 1948 「所謂石刃と連続割裂技法について」『人類学雑誌』 第60巻 第2号 33～39 頁

表1 石器観察表

番号	出土地点	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	受入番号	備考
1	中国内蒙古自治区 ドロソノ	細石刃	(1.85)	0.80	0.20	0.3	543-2000	珪質堆積岩
2	中国内蒙古自治区 ドロソノ	細石刃	1.55	0.50	0.15	0.1	543-1999	玉髓
3	中国内蒙古自治区 ドロソノ	細石刃	1.30	0.45	0.15	0.1未満	543-1998	珪質堆積岩



写真は縮尺不同

図1 内蒙古自治区の細石刃

青森県立郷土館研究紀要 第49号(令和7年3月) 正誤表

頁	行・図番号	誤	正
40	本文14行目	ホロンバイル採集遺物採集資料に関する大貫静夫らの調査研究成果	ホロンバイル採集資料に関する調査研究成果
43	23行目	石材は、 <u>1</u> は玉髄である。 <u>2・3</u> は赤みのある珪質泥岩	石材は、 3 は玉髄である。 1・2 は赤みのある珪質泥岩
43	49行目(下から3行目)	細石刃石器群を地敷採集し、	細石刃石器群を多数採集し、
44	31行目(下から21行目)	蓬田村編纂していた	蓬田村史を編纂していた
44	34行目(下から18行目)	(大高勢津子 1977)。	(大高勢津子 1972)。
46	37行目(下から15行目)	ロシア沿海州南部 黒曜石の「他に珪質岩や凝灰岩・チャート等の細石刃核もある」	削除
47	表1 番号2 備考	玉髄	珪質堆積岩
47	表1 番号3 備考	珪質堆積岩	玉髄